



Title	ワークショップへの感想文⑥
Author(s)	神沢, 美津穂
Citation	臨床哲学ニュースレター. 2022, 4, p. 123-124
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86372
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集3 「〈応用〉することの倫理——緊縛シンポ、ブルーフィルム、ジェンダー」

ワークショップへの感想文⑥

神沢美津穂（男性）

私は思春期を迎えた頃から、緊縛写真を見ることが好きでした。写真の中にいる縄で緊縛された女性が、自分にとって性的憧憬の対象でした。

緊縛に関するシンポジウムがあると耳にして、ネットで聴講しました。メモを取りながら熱心に聴いてはいたのですが、心の中にすっきりしないものを感じていました。

私が感じていた疑問点は2つです。

①緊縛の歴史

②緊縛というものの扱い方

①の緊縛の歴史はそんなに簡単に割り切れるものではないと考えています。現代的な意味で言うSMの中の「緊縛」は、あくまで近代（しかも戦後？）になって始まったものと思われます。古くから存在していた捕縛術のようなものの影響を受けて発展したとしても、ある程度の範囲を持って広まったのは昭和期以降のことでしょう。大正時代の雑誌『変態性欲』のうち復刻出版されている部分を見ても、サディズムについての言及はありますが、日本の緊縛について触れた記述がありません。

マスターK氏のような先行研究があるにせよ、「これが歴史」と、半ば決め付けるようにシンポジウムで話されていたことに若干の疑問を感じました。

この分野にはまだ「定説」というものはありません。わからないならわからないなりに、「よくわかりません」という謙虚な姿勢が必要だと思います。

まだはつきりとした「定説」もないのに、「歴史はこうです」と語られていることに、おぼろげな違和感をもちらながらシンポジウムを聴いていました。

②の扱い方について、緊縛を「性」から無理に切り離そう、切り離そうという主催者側の意図を強く感じました。緊縛は「アート」としての側面を持っていることは私も認めます。しかし、緊縛された女性が性的憧憬の対象であった自分にとって、（たとえ着衣であったとしても）私は緊縛された女性の姿を単なるアートとして見られず、気持ちは性的な方向に向いてしまいます。それはやはり、緊縛というものが被緊縛者の自由を奪い、縛り手が被緊縛者を自分の支配下に置く行為だからだと思います。

緊縛に芸術的側面があることは認めます。でも、性的な側面で緊縛を楽しんでいる人も数多く存在します。近年、海外における緊縛が注目されています。Twitterでも外国人による多くの緊縛画像を目にすることができます。彼らがみな、「アート」と割り切って緊縛を行っているわけではありません。

大学という場で緊縛を扱う以上、「無害化」しなければならない事情があったのでしょう。しかし、それでは緊縛を全体的に理解することはできません。あまりにも強引な「性」と「アート」の切り離しに、強い不自然さを感じました。同時に、主催者側の勉強不足を感じました。

私があのシンポジウムを見ながら感じていたおぼろげな違和感をはっきりとさせてくれたのは河原先生の Note でした。

あのシンポジウムは終了直後からいろんな批判の声が出ていました。もっと早い段階で総括することもできたと思います。ワークショップで河原先生と小西先生があそこまで強く主張されて、主催者はようやく問題を認め善処を約束しました。それまで、ほぼ1年にわたり放置したのです。

河原先生が Note においてシンポジウムの批判をされたのは、2021年1月でした。シンポジウムの主催者側は研究者による告発がなされていることに早い段階で気付いていたはずです。

ワークショップで主催者側が謝罪し、善処を約束しました。しかし、なぜワークショップで取り上げられるまで主催者側が表に出てこなかったのか、そして、プレ動画がまだサイトに残っていることさえ知らなかつたのか、どうしても理解できません。

ワークショップは時間的な制約が多く、様々なことが未解明のまま終わったように感じています。

さらなる真相究明が必要であると、ワークショップを聴講しながら感じました。

(かみさわ・みづほ)